

## 資料紹介

### 中京大学図書館蔵

## 新古今和歌集

後藤重郎

本学図書館蔵『新古今和歌集』は、貴重図書中に

- (1) 伝足利義政筆新古今和歌集（貴45）
- (2) 室町中期書写新古今和歌集（貴46）（残欠）
- (3) 伝阿仏尼筆新古今和歌集（貴47）（卷十九神祇  
一軸）

の三本が蔵せられ、既に長谷川端教授により、『中京大学附属図書館蔵国書善本解題（増補版）』（中京大学図書館学紀要）8号 一九八七・三）において解題が行はれ、また(3)は長谷川万希子さんにより、「中京國文學」第八号（中京大学国文学会）において、「中京大学図書館蔵伝阿佛尼筆新古今和歌集（神祇） 翻刻」として、解説・翻刻が行はれてゐる。本稿においては、(1)(2)に関し更に細目にわたつての紹介を試みたい。

伝足利義政筆新古今和歌集

(国書善本)  
解題四五

図書番号「貴四五」。二重箱入。外箱は桐塗箱。縦三〇・五糎、横二二・二糎、高さ一〇・二糎。印籠蓋、蓋の高さ八・二糎、蓋の地右寄りに、「参号(朱)」慈照院「義政公筆」新古今集」式冊」 船廼舎(長方形朱印)「(は改行)の紙片を貼付する。内箱は黒漆塗、金泥による面取、縦二七・五糎、横一九・三糎、高さ六・〇糎。印籠蓋、蓋の高さは二・三糎。蓋表中央に、金泥にて、「新古今和歌集 東山義政公筆」と記す。身は左右に金属製の鐙があり、紫地平織の紐をつける。蓋身共に裏は金梨地の頗る典雅な様相を示す。

極札は二通あり、左のごとくである。

(1) 包紙表「極札 了仲」

極札「慈照院義政公 新古今和歌集 全部

了仲(角墨印)「(表)

「古筆了仲」(長方形墨印)(裏下部)

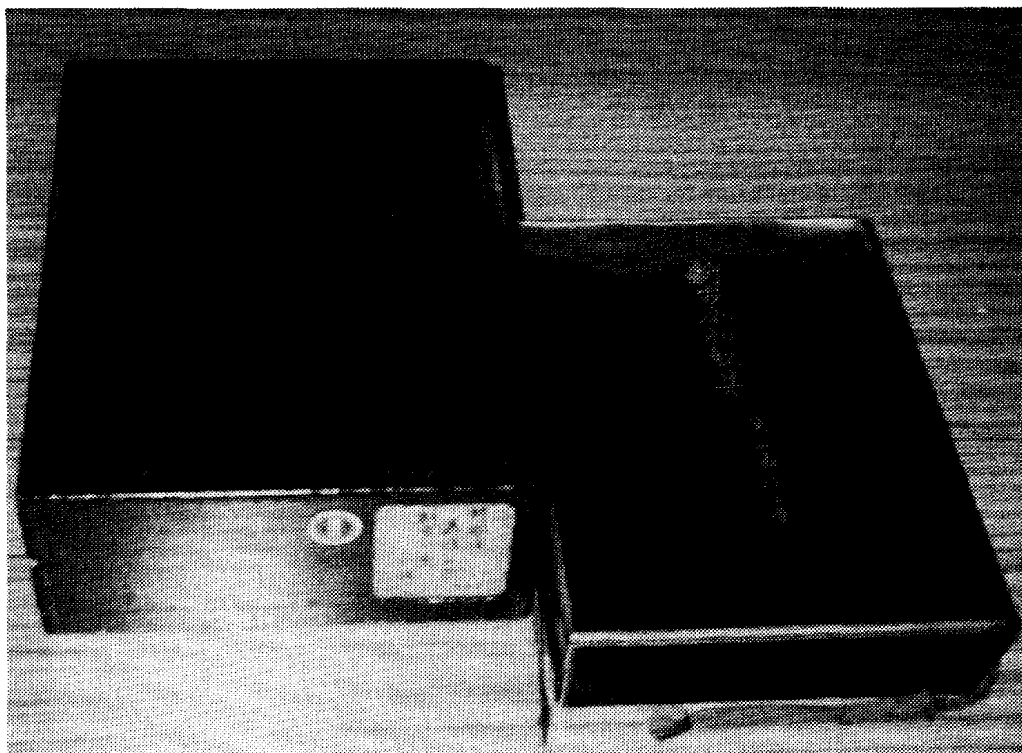
(2) 包紙表「新古今集 慈照院義政公筆 極札 了音」

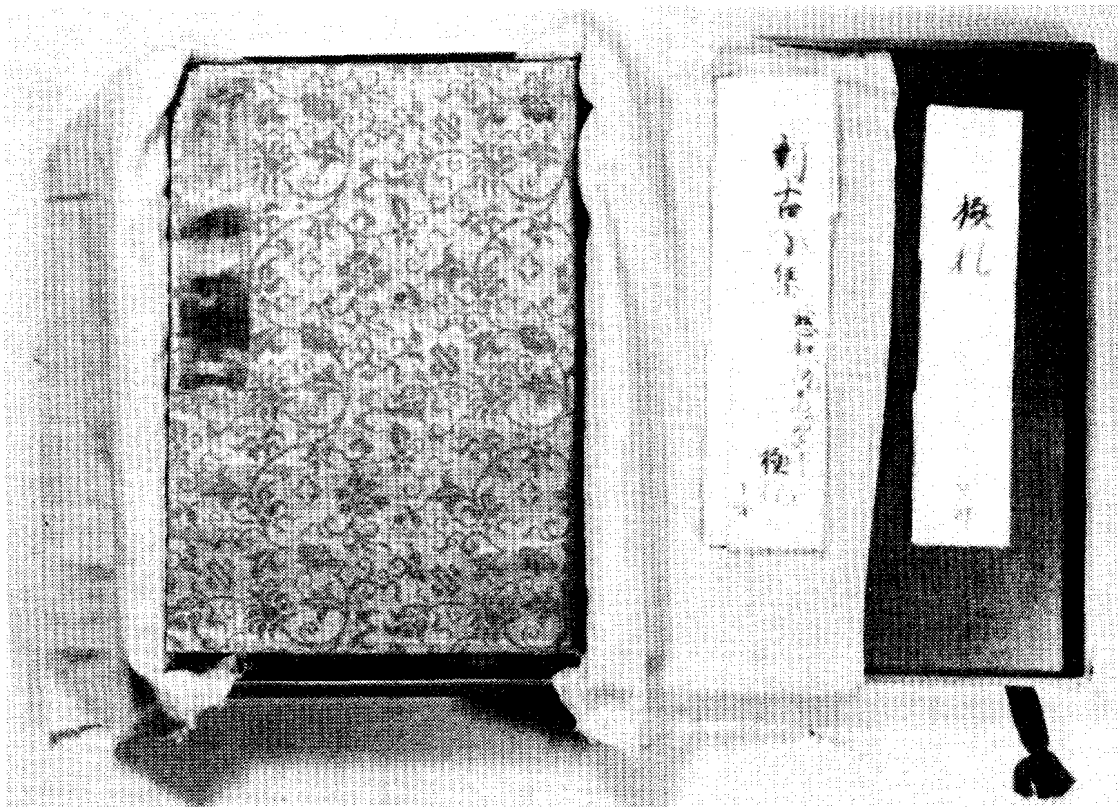
極札「東山慈照院義政公 新古今和歌集

琴山(角墨印)「(表)

「(朱割印) 巳丑三 了音(角墨印)(裏上部)

(写真1、外箱・内箱)





(写真2、極礼・上巻表紙)



(写真3、上巻本文・下巻表紙)

列帖装二冊。縦二四・八糎、横一七・〇糎。表紙、唐草模様織出し金欄表紙。題簽、表紙左肩に朱地金泥模様の紙  
(縦一三・二糎  
横二・九糎)に「新古今和歌集上(下)」と記された原題簽を貼布。見返は絹地に金銀の雲形模様、金の松・竹・そ

の他草木を描く。料紙鳥の子。伝承筆者は足利八代將軍義政となるが、確証はない。但し料紙・書風よりして、室町  
中期の書写にかかるものと認められる。紙数、上冊一四〇葉、第一・一四〇葉白紙、墨付一三八葉。第二葉裏より第  
五葉裏まで真名序を一面八行に、第六葉裏から第一二葉表まで仮名序を一面八行に、第一三葉裏から第一三九葉裏ま  
で卷一から卷十までを、一面十行・歌一首一行書に記す。下冊一三七葉、第一・一三七葉白紙、墨付一三五葉。第二  
葉裏より第一三四葉裏まで卷十一から卷二十までを、一面十行・歌一首一行書に記し、第一三五葉裏から第一三六葉  
裏まで、後記「新古今被直事」を記す。歌数は、卷一、九八首・卷二、七六首(七六首増一)・卷三、一一〇首・卷  
四、一五二首・卷五、一一四首・卷六、一五六首・卷七、五〇首・卷八、一〇〇首・卷九、三九首・卷十、九六首  
(九四首)・卷十一、九一首・卷十二、六七首(六八首)・卷十三、八五首・卷十四、一〇二首・卷十五、一〇〇首・  
卷十六、一五〇首(一五二首)・卷十七、一〇二首・卷十八、一六一首(一六二首)・卷十九、六四首・卷二十、六三  
首、計一九七六首を数える。(上記は新編国歌大観勅撰集編所収『新古今和歌集』と比較したもので、括弧内は同集によるものであり、異  
同の見られる場合のみ注記を行った。但し両書同数であつても、増減の結果同数となつたものは之を示した。)  
その内訳は左のごとくである。

○卷二

- (1) 162 あし引の(藤原興風)の歌の次に

題不知

赤人

1999 恋しくはかたみにせんと我やとにうへし藤なみいまさかりなり

- (2) 170、171を混じ一首に記す(括弧内は新編国歌大観本により、句読点・濁点を除き補ひ示す。以下同じ。)

170 山家三月盡をよみ侍ける

170 藤原伊綱

(170 こぬまでも花ゆゑ人のまたれつる春もくれぬる太山へのさと)

(171 題しらす)

(171 皇太后宮大夫俊成女)

171 いそのかみふるのわさ田を打かへし恨かねたる春のくれかな

(右の場合、170は詞書・作者名、171は歌と、それぞれ不完全ではあるが歌としての要素を備へて居り、二首とも考へ得るが、このやうな場合は一首と数へることとする)。

○卷十

(3) 904 するかなる(業平朝臣)の歌の次に

延喜御時屏風の歌

凡河内躬恒

1989 浪のうへにはのにみえつ、行舟は浦ふくかせはしるへなりけり

(4) 911 神風の(よみ人しらす)の歌の次に

(たいしらす)

源順

2002 なをきけは昔なからの山なれとしくる、秋は色かはり行

○卷十二

(5) 1130 (賀茂重政)の歌欠

○卷十六

(6) 1530 (1528)

(大納言経信)の歌欠

(括弧内は旧国歌大観番号。以下同じ)

(7) 1555 (1553)

、1556 (1554)を混じ一首に記す

(題しらす)は1554 (1552)を受ける)

(題しらす)

1555 (1553) 俊恵法師

(1555 (1553) 難波方しほひにあさるあしたつも月かたふけは声のうらむる)

(1556 (1554) 和歌所歌合に海辺月といふ事を)(1556 (1554) 前大僧正慈円)

1556 (1554) 和歌のうらに月のてしほのさすままによるなくつるの声そかなしき

○卷十八

(8) 1737 (1735) (小馬命婦)の歌欠

右において、(2)(5)(6)(7)(8)は書写者による誤写の結果か、親本において既にこのやうになつてゐたか不明であるが、何れにしても切出歌には関係なく、誤脱によるものと認められる。(1)(3)(4)の歌は何れも切出歌(異本所収歌)と目される歌である。但し、本書と全く一致する切出歌を有する伝本は、管見の範囲では未だ見ることを得ず、如何なる過程を経て、切出歌に関し本書のごとき形となつたかは不明である。

猶、本文に関し、右の外に新編国歌大観本に比し、歌順の異なる箇所が三箇所あり、左のごとくである。

○卷三

(9) 182、181の順となる

齋院に侍けるとき神たちにて 式子内親王

182 忘れやあふひを草に引結びかりねの野への露の明ほの

題不知 大宰大式重家

181 卯花<sup>ウマ</sup>さきぬるときはしろたへの浪もてゆへるかきねとぞみる

○卷十五

- (10) 1431 (1430)、1430 (1429) の順となる

(題しらす)

(よみ人しらす)

1431 (1430) 秋の田のほむけのかせのかたよりに我は物おもふつれなき物を

1430 (1429) あふことをおほつかなくてすくすかな草葉の露のをきかはるまで

○卷十七

- (11) 1591 (1589)、1590 (1588) の順となる

(題しらす)

在原業平朝臣

1591 (1589) はる、夜のほしか河へのほたるかもわかすむかたのあまのたく火か

1590 (1588) あしの屋のなたのしほやきいとまなみつけのをくしもさ、すきにけり

右のうち、(9)は佐賀大学蔵小城鍋島文庫旧蔵本にも見られるところであるが、同書は他にも歌順の異なる箇所があり、一致するのは一箇所のみである。(10)(11)は管見の範囲では他に所見なく、恐らくは(9)をも含めて三箇所とも、本書が何等かの事情により、独自の逆順の本文を作り上げたのではと推測されるものである。

(12) 猶、諸本により異同の多く見られる、卷七賀の卷末部は次のごとくである。

寿永元年大嘗会主基方稻舂歌丹波」

国長田村をよめる」

権中納言兼光」

754 神代よりけふのためとややつかほになか田のいねのしなひそめけん」

建久九年大嘗会悠紀歌青羽山 式部大輔光範」

755 たちよれはす、しかりけり水鳥のあをはの山の松の夕かせ」

おなし大嘗会主基屏風に六月松井」

権中納言資実」

756 ときはなる松井のみつを結ふ手のしつくことにそ千世はみえける」

この箇所は、歌の順序・題詞の年号・悠紀歌主基歌の別により諸本十六種類に分たれるのであるが、本書は、歌順・年号・悠紀歌主基歌の別からしても、正しい姿を伝える内容となつてゐる。最後に、下冊巻末に記される「新古今被直事」の条は左のごとくである。

新古今被直事」

春下」

太神宮に百首歌たてまつり侍し中に」

太上天皇」

いかにせむよにふるなめしはの戸にうつろふ花の春の暮かた」

秋上」

同詞」

あさ露のをかのかやはら山風にみたれて物は秋そかなしき」

已上二首被出之」



秋下

御製』(裏)

さひしさはみやまの秋のあさくもり」

可被切入

寂蓮歌」

むら雨の露もまたひぬまきの葉に」

此歌下

左衛門督通光」

明ほのやかはせの浪のたかせ舟」

此歌上」

恋歌三」

たのますは人をまつちの山なりと」

可被切入 定家つらき嵐のこゑもうし 下」

故摂政』(表)

なにゆへと思ひもいれぬゆふへたに 上」

右は、太上天皇(後鳥羽院)の御歌二首(「いかにせむ」「あさ露の」)を切出し、二首(「さひしさは」「たのますは」)を切入られた折の事情を伝えるものである。そしてこれは定家自筆御室御本と関係の深い内容の記事であるが、詳細は拙稿「烏丸本新古今和歌集奥書に関する一考察」(名古屋大学文学部研究論集(昭34・3)↓昭43 塙書房)に譲りたい。

### 室町中期書写新古今和歌集

(国書善本  
解題四六)

図書番号「貴四六」。袋綴、残欠一冊本。縦二四・七糎、横二一・〇糎。表紙は淡黄色横縞太織布表紙(改装)。見返

は楮紙、本文の紙よりは新しく改装時のものと目される。題簽は表紙左上に貼布されてあつた跡（縦一九・七厘、横三・五厘）があるが現在は剥落してない。料紙は楮紙。料紙・筆跡より室町中期の書写にかかるものと認められる。紙数七六葉、裏打補修が行はれてゐる。第一葉裏より第五葉表にかけ仮名序を一面一二行に記す。但し、第一葉裏の最初の五行は欠損あり、判明する部分は左のごとくである。

（やまとうたは）む（かしあめつちひらはしめて）

（第一行）

人のしわさいまた（さたまらさりし時葦原）

（第二行）

中国のことはとし（て稻田姫素鵲のさとより）

（第三行）

そつたはれりけるし（かありしよりこのかたその）

（第四行）

みちさかりにおこりそのなかれ（いまにたゆる）こと

（第五行）

（括弧内は欠損部分。新編国歌大観勅撰集編『新古今和歌集』により欠損部分を補ふ。但し、句読点・濁点を除く。』は改行を示す。）

第五葉裏より第七六葉裏にかけ、巻一から巻七の中途（<sup>724</sup> 詞書 作者名）までを、一面一二行、歌一首一行書に記す。第七六葉表の終りの部分・同裏六行目まで損傷欠脱の部分があり、次のごとくである（括弧内は欠損部分。記載要領は前記、序と同じ）

貞信公家の屏風に

元輔

720（神無月紅葉）もしらぬときは木に万代か、れ峯の白雲

（たいしらす）

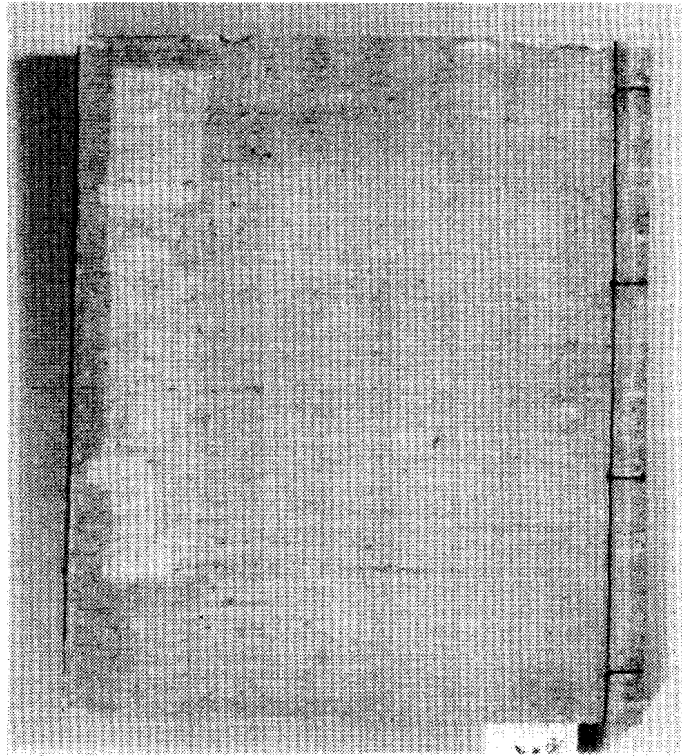
伊勢

『76表

721（山風はふけとふかねとしら浪の）よする岩（ねはひさしかりけり）

（後一条院うまれさ）せ給へりける九月の月くまなかりける

（夜）大二条関白中将に侍ける時わかき人くさそひ



(写真4、表紙)



(写真5、本文)

(いてて) 池の(ふねにのせて) 中島の松陰<sup>(ママ)</sup>さしまはすほとおか」  
しくみえ侍(りければ) 紫式部」

722 (くもり) なく千とせにすめる水のおもにやとれる月の影もくまなし」

歌数は、巻一、九六首(九八首)・巻二、七八首(七六首)・巻三、一一三首(一一〇首)・巻四、一五三首(一五二首<sup>増二</sup>・<sup>減一</sup>)・巻五、一一五首(一一四首)・巻六、一五六首(一五六首)・巻七、一八首(五〇首)<sup>(括弧内の数字は新編国歌大観による数字)</sup>  
都合七二八首<sup>(損傷欠脱歌も数へる)</sup>である。その内訳は左のごとくである。

○巻一

(1) 22 (凡河内躬恒)の歌欠

(2) 91 (藤原定家朝臣)の歌欠

○巻二

(3) 110 春雨は(赤人)の歌の次に

(題不知)<sup>(括弧による詞書はこの歌よりも前にあり。以下同じ。)</sup> 中納言家持

1979 故郷に花はちりつ、みよしの、山の桜はまたさかぬめり

(4) 146 おしめとも(後白川院御歌)の次に

<sup>(ママ)</sup> 大神宮に百首歌たてまつりけるに 太上天皇

1980 いかにせむ世にふるなかめしはのとうつろふ花の春の暮かた

○巻三

(5) 209 有明の<sup>(ママ)</sup>(摂政大政大臣)の歌の次に

(千五百番歌合に)

顕昭法師

1981 郭公むかしをかけてしのへとや老のねさめに一こゑそする

(6) 238 誰か又(皇太后宮大夫俊成)の歌の次に

(たいしらす)

赤染衛門

1982 五月雨の空たにすめる月影に涙の雨ははるゝまもなし

(7) 248 夕くれは(藤原定家朝臣)の歌の次に

橘に時鳥なきければよめる

増基法師

1983 郭公花たちはなの香はかりになくやむかしの名残なるらん

○卷四

(8) 298 昨日まで(藤原雅経)の歌の次に

太神宮にたてまつりし秋歌の中に 太上天皇

1984 朝露のをかのかやはら山風にみたれて物は秋そかなしき

(9) 314 この夕(赤人)の歌の次に

家に七夕の心を読侍けるに

宇治関白太政大臣

1986 契けんほとはしらねと七夕のたえせぬけふの天の川かせ

(10) 384 (堀河右大臣)の歌欠

○卷五

(11) 440 嵐ふく(俊恵法師)の歌の次に

(題しらす)

前中納言匡房

1986 たかさこのおのへにたてる鹿のねにことの外にもぬる、袖かな

○巻七

(12) 724の詞書・作者名までで終り、以下欠脱。(前記歌数は、たとへ一部でも記してゐる724までを数へ、また721も本来は記されてあつたものゆゑ歌数の中に加へた。)

歌数については以上のごとくであるが、巻七における725以下の欠脱は別として、(1)(2)(10)の三首の欠脱は、書写の際の誤脱か、或は親本において既にこの欠脱があつたものか不明であるが、何れにしても、切出歌には関係なく、誤脱によるものと認められる。(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(11)の歌は何れも切出歌(異本所収歌)と目される歌であり、他本と比較する時(拙稿「異本所収歌一覽表」  
〔前記「新古今和歌集の基礎的研究」〕、歌は八首全く一致する本でも、その位置が異つてをり、その点貴重な内容を有する。全体では猶相当数の切出歌と目される歌を含んだ筈にて、巻七以下の欠脱が惜しまれるものである。

猶、右の外に新編国歌大観本に比し、歌順の異なる箇所が一箇所あり、左のごとくである。

○巻六

(13) 649、648の順となる。

最勝四天王院の障子に鳴海の浦かきたる

所 藤原 秀能

649 風ふけはよそになるみのかたおもひ思はぬ浪になく千とり哉

千五百番歌合に

正三位季能

648 さ夜千とりこゑこそ近くなるみかたくふく月にしほやみつらん

管見の範囲では、この歌順となる本文を有する本は本書のみであるが(拙稿「歌順異同一覽表」  
〔前記「新古今和歌集の基礎的研究」〕、恐らくは誤写

に基づく結果ではなからうかと推測されるものである。

以上、両書の極めて簡単な紹介を行ったが、後者（貴46）が卷二十まで揃つてゐたらどんなにか豊かな内容であつたかと惜しまれ、せめて下冊なりとも出現し、その内容の補填されることが心から望まれる次第である。